

女性が抱える

健康問題とその予防

第3話

月経痛を我慢しないで



社会人1年生という23歳の女性。月経痛がひどくて仕事もままなりません。外回りの営業担当でしたから、月経の時など、車の中で痛みに耐えています。

だから、営業成績もなかなか上がり、昇社すると上司から嫌みを言われたりして……。

そんな中、雑誌に掲載された僕の記事、「月経痛、我慢しますか？」が目にとまり、受診されました。聞けば、月経が始まって間もなくの頃、痛みに耐えかねて母親に相談すると、「子どもを産めば治るから」と。将来結婚するかどうかはもちろん、子どもを持つろうかと思ったそうです。その時以来この件で母親に相談することはなかったと言います。

情報が届かなかったばかりに、彼女

が10年近く我慢し続けることになった月経痛。実は、痛みを和らげることは、決して難しくありません。

日本産科婦人科学会は、月経期間中に月経に随伴して起こる病的症状を月経困難症と定義しています。したがって、「薬を使う」「日常生活に支障がある」などは月経困難症と診断すべきで、中高生といえども4割ほどはこの診断のもと治療を受ける必要があると推測されます。

月経困難症の治療は鎮痛剤や漢方薬、鎮痙剤などを使うことが多いのですが、最近では経口避妊薬（ピル）と同様の成分からなるエストロゲンとプロゲステンを含有する配合薬（LEP製剤）を積極的に使うことをすすめています。

なぜLEP製剤を使うかというと、

月経困難症を経験した女性は、将来子宮内膜症になる危険性が2.6倍になるという報告があるからです（図）。

ご存じのように子宮内膜症というのは、過度の子宮収縮などにより、本来子宮内にある内膜が卵巣や骨盤腔に移植し、月経の度に移植した部位で出血して腫瘍が大きくなり、不妊の原因にもなる病気です。

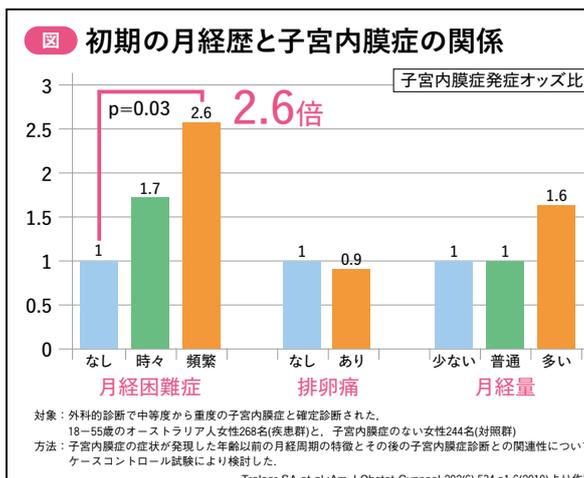
子宮内膜症は現代病と言われていますが、その理由としては、妊娠・出産・授乳に消極的な現代の女性は、昔の女性に比べて月経の回数が増える傾向が多くなっていることがあげられています。もちろん、産むか産まないかは個人の選択の問題ですので、産まなくなつた時代に月経とどうつき合っていくかを考えることが大切になります。

痛いから痛み止めを使うのは、对症



【執筆者】
北村 邦夫
きたむら くにお
日本家族計画協会 会長

自治医科大学を1期生として卒業後、群馬県庁に在籍する傍ら、群馬大学医学部産科婦人科学教室で臨床を学ぶ。1988年から日本家族計画協会クリニック所長。東京都予防医学協会理事、日本母性衛生学会常務理事。2018年より現職。



療法といつて根本的な治療法にはなりません。LEP製剤を服用することで排卵が止まり、結果として子宮内膜の増殖が抑えられ、過度の子宮収縮が起これらに済みます。こう考えると、月経痛を訴える女性には、積極的に婦人科への受診をすすめてほしいものです。